

「名詞（句）＋take＋時間」表現における 「時間」の特徴について

岡 良 和

〈キーワード〉

① take ② 時間 ③ 投射

〈論文要旨〉

本稿の目的は、「名詞（句）＋take＋時間」表現における「時間」の特徴について考察することである。Take の中心義が「掴む」であるため、その目的語となる名詞（句）の指示物は、掴むことができる物理物となる。この物理物の特徴が「時間」に投射されて、「名詞（句）＋take＋時間」表現が生じると考えられる。

The ‘*Time*’ in the ‘*Someone Take Time*’ Construction

Yoshikazu OKA

〈Keywords〉

① take ② time ③ mapping

〈Abstract〉

In ‘ $NP_1 + take + NP_2$ ’ construction, NP_2 is typically a physical object to be taken by someone. This feature is metaphorically mapped to ‘time’, generating ‘*someone + take + time*’ construction. This metaphorical mapping yields time as a countable object in ‘*someone + take + time*’ construction.

「名詞（句）＋ take ＋ 時間」表現における 「時間」の特徴について

岡 良 和

はじめに

本稿の目的は、「名詞（句）＋ take ＋ 時間」表現において、特に時間の特徴について考察することである。Take の中心的な意味が「掴む」であるので、その目的語となる名詞（句）は、掴むことができる物理物となる。この物理物の特徴が時間に投射されて、「名詞（句）＋ take ＋ 時間」表現が成立すると考えられる。

1. 先行研究

Norvig and Lakoff (1987) においては、下記 (1a-b) の例文におけるように、take の中心的な意味を take-1 とし、この意味は grab にほぼ等しいとみなしている。

(1) a. The baby took the toy from its mother.

b. The baby took the toy from the table.

— Norvig and Lakoff (1987: 199) (下線筆者)

そして、上記 (1a-b) には、下記 (2) の特徴が現れていると述べている。

(2) ...the agent is restricted to be a human.... In the typical case, the agent uses his hand as the instrument of movement by extending his arm, and the patient is a relatively small, light-weight physical object within grasping distance of the agent. (動作主は人間に限定される…。典型的には、動作主は自分の腕を伸ばし、移動させる手段として手を使う。被動作主は比較的小さくて軽い物理物で、動作主がそれを掴める範囲内にある。)

— Norvig and Lakoff (1987: 199) (下線・和訳筆者)

上記 (2) でも指摘されているように、take の目的語の典型的な指示物は、手に取ることが出来るような物理物である。このことは、下記 (3) においても反映される。

(3) take a glance at

— Norvig and Lakoff (1987: 204) (下線筆者)

上記 (3) は、上記 (1a-b) に下記 (4) が作用して生じた例であるとされる。

(4) THE METAPHOR THAT PERCEIVING IS RECEIVING

（知覚することは受け取ることである、というメタファー）

— Norvig and Lakoff (1987: 204) (和訳筆者)

さらに、上記 (4) に従い、下記 (5) に示されるような説明がなされる。

(5) ...this sense is linked to take-1, where the default patient is a small physical object.

Under the metaphorical mapping, the size of the physical object is mapped onto the duration of the action, yielding short actions in the default case, ...

（この意味は take-1 に関連しており、デフォルトとなっている被動作主は小さな物理物である。この比喩的投射のもとで、物理物の大きさが行為の継続性に投射される、そして、デフォルトにおいては短い行為となる…。）

— Norvig and Lakoff (1987: 204) (下線・和訳筆者)

上記 (5) で指摘されているように、上記 (1a-b) から上記 (4) の拡張を経て生じた上記 (3) においても、take の目的語である限りにおいて、比較的短い区切りを有する指示物とみなされる必要がある。従って、take に後続する「時間」も短く区切りをつけることができる単位としての「時間」であることになる。

2. 行為に伴う「時間」

下記 (1) において、時間という抽象物は、take の主語の指示物 (He) が「掴む」対象物として表現されている。

(1) He took two years to write the novel.

（彼はその小説を書くのに 2 年を要した。）

— 『ジーニアス英和大辞典』 (s.v. take IV 9 語法) (下線筆者)

上記 (1) は、主語が人という動作主であり、時間が複数として捉えられる普通名詞となっている。このように数量化されていることからわかるように、時間が同質の物理物として捉えられているのである。

下記 (2) のように、Whorf (1956) は、このような時間の捉え方が人為的な客体化であることを指摘している。

(2) Concepts of time lose contact with the subjective experience of “becoming later” and are objectified as counted QUANTITIES, especially as lengths, made up of units as a length can be visibly marked off into inches. A ‘length of time’ is envisioned as a row of similar units, like a row of bottles.

(時間の概念は「より後になる」という主観的な経験とのつながりを失い、数えられる量として客体化される。特に、インチで視覚的に印をつけられるように、単位の集まりで構成されている長さとして客体化される。「時間の長さ」は、一列に並んでいる複数の瓶のように一列に並んでいる互いに似通った別個の物理物として捉えられるのである。)

— Whorf (1956: 140) (下線・和訳筆者)

主観的には、ある出来事のあとに別の出来事が起こる、という具合に、「より後になる」という時間の捉え方がなされる。たとえば、飼育している牛を牛舎に入れた後で隣人が訪ねてきた、という具体的な経験に基づく時間の捉え方がそうである。

時間は、それ自体で独立した複数化できる物理物ではなく、出来事に伴う。時間が複数化されていない事例を、下記 (3) で示す。

(3) 〈状況〉：男が広大な土地に放牧された牛を眺めている。

Tom : It takes work, and it takes sweat. And it takes time,

(労働しないとイケない、汗をかかないとイケない。そして時間がかかる…。)

— *Red River* (下線・和訳筆者)

上記 (3) では「牧場を大きくすること」に「労働」という活動や、その活動に伴う「汗」という具体物が付随することが示されている。そしてこれらの「労働」や「汗」に基づいて「時間」の概念が生じる。労働やそれに伴う汗が多ければ多いほど労働にかかる時間も多くなるためである。

下記 (4) は、手間の分量に応じて時間が多くかかるという日常生活の経験に基づく事例である。

(4) 〈状況〉：入植農民達の中心人物スターレット (Starrett) を亡き者にして自分の牧場から農民達を追い出そうとするライカー (Ryker) はガンマンのウィルソン (Wilson) と計画を練る。

Ryker : Just get Starrett in here. It wouldn't take much to bait him.

(スターレットをこの酒場に来させるだけでいいんだ。餌をまいて奴を罠にかけるのに大した手間はかからないだろう。)

Wilson : One's run already. It won't take much to stampede the rest.

(すでに追い出した。残り全部が一斉に逃げ出すようにするには大して苦労はしないだろう。)

— *Shane* (下線・和訳筆者)

上記 (4) では、much の後に time が省略されているとも考えられるが、trouble (手間や苦

労）が省略されているとも取れることから、ある行為（手間や苦労）と時間とが未分離な状態が示されている。Much は不定型な物質名詞に付加されることから、much time も一定の形を有していないことになる。従って、take の典型的な目的語の指示物に見られる「手で持つことができる」物理物とは捉えられていない。

3. 具体的物理物としての「時間」

下記（1）は、時間の分量が長さによって計測される事例である。

- (1) The work *took a long time* to complete.

（その仕事を完成するのに長いことかかった）

—『新英和大辞典』（s.v. take 6a）（下線筆者）

上記（1）では時間がある長さを有する物理物として捉えられている。これは、通常、人の活動の継続と物理的な長さには並行性があるためと思われる。このことは、移動をする場合に、移動した距離が延びて行くとともに時間が経過するという経験からも推測できる。下記（2a-c）は、time が省略され、take が long と直接共起する事例である。

- (2) a. 〈状況〉：牛を連れて行く途中、大雨で渡河が急がれる最中に燃料用のまきを探しに行っていた助手がようやく戻って来る。

Groot : Where [have] you been? It took long enough! Now we're moving. I ain't had dinner.

（どこに行ってたんだ？ずいぶん長くかかったな。出発だ。食事は抜きだ。）

— *Red River*（下線・和訳筆者）

- b. 〈状況〉：インディアンに襲撃されていたところへ援護が来る。

Cherry : Glad you got here. They hit us about an hour ago. [Are] The others coming?

（来てくれてよかった。彼らは1時間ぐらい前に襲撃してきたんだ。他の男たちも来てくれるのか？）

Matt : Yeah. It shouldn't take long. There're coming in from both sides of that slope.

（ああ、長くはかからない。あの斜面の両側から来てくれる。）

— *Red River*（下線・和訳筆者）

- c. 〈状況〉：自首を勧める恋人のジー（Zee）とジェシイ（Jesse）が話し合う。

Jesse : I can't, Zee. I'd go crazy in prison.... Zee, you said you'd wait.

（自首はできないよ、ジー。刑務所に入ったら気がおかしくなると思う…。ジー、待っていてくれると言ってくれたね。）

Zee : However long it took.

(いつまでも待ってるわ。)

— *Jesse James* (下線・和訳筆者)

Much と異なり、long は具体的な普通名詞に付加されることから、上記 (2a-c) では、時間が「長さ」を有する具体的な物理物として捉えられていることになる。

4. 所有物としての「時間」

時間は人により所有される物であることが下記 (1a-f) の事例において示される。

- (1) a. Put aside some time for ping pong.
(ピンボンの時間を取っておきなさい。)
- b. Do you have much time left?
(多くの時間が残っていますか。)
- c. I don't have the time to give you.
(あなたにあげる時間はない。)
- d. He's living on borrowed time.
(借りた時間で彼は生活している。)
- e. You don't use your time profitably.
(君は時間を有効に使っていない。)
- f. I lost a lot of time when I got sick.
(病気になったとき私は多くの時間をなくした。)

— Lakoff and Johnson (1980: 8) (下線・和訳筆者)

上記 (1a-f) は「時は金なり (TIME IS MONEY)」というメタファーにより「お金」の属性が「時間」に投射されている。抽象物である時間が、所有可能な貴重な物理物として捉えられているからこそ、それぞれの下線を施した動詞 (句) の目的語として現れているのである。そして「時間」が「お金」と同様に授受可能な物理物として捉えられる事については下記 (2) の記載がある。

- (2) Time in our culture is a valuable commodity. It is a limited resource that we use to accomplish our goals. Because of the way that the concept of work has developed in modern Western culture, where work is typically associated with the time it takes and time is precisely quantified, it has become customary to pay people by the hour, week, or year.

(我々の文化において時間は価値のある品物である。時間は目標を達成するために我々が使う限られた資源である。労働は典型的にそれにかかる時間と結びつけられ

時間は正確にその量が計測できるという現代の西洋文化において、労働の観念が発達してきた方法のために、時間や週や年の単位でお金を支払うことが慣習となった。）

— Lakoff and Johnson (1980: 8) (下線・和訳筆者)

上記 (2) において、「時間」は価値がある「計量可能」な「物」とであると見なされると述べられている。「お金」が商品と共存することから離れ、それ自体を所有し、授受できることができるのと同様に、「時間」は行動や出来事等と共存することから離れ、それ自体を所有し、授受できることが可能であるかのように見なされる。このようにして「時間」は人が「掴み取る」対象となるのである。

時間が貴重な物理物として捉えられるために、下記 (3) のように時間を所有することも可能な事であると見なされる。

(3) 〈状況〉：牛の群れを連れてカウボーイ達が線路を横切る時に、それを待つ機関士が言う。

Engineer : I'll wait here all day for you to cross. Take your time.

(あなた方が渡るのをここでずっと待ちますよ。ゆっくりやってください。)

— *Red River* (下線・和訳筆者)

上記 (3) では *your time* のように時間が所有物とみなされている。時間が自分の所有物であればその使い方は自分の自由である。したがって *take your time* は「自分が所有する時間を取る」から「ゆっくりやる」という和訳が生じる。

5. 主語 + TAKE + NP₁ [間接目的語 (人)] + NP₂ [直接目的語 (時間)] 構文

下記 (1a-b) では、「主語 + TAKE + NP₁ [間接目的語 (人)] + NP₂ [直接目的語 (時間)]」構文が現れている。

(1) a. 〈状況〉：連邦保安官ウィル (Will) は殺人犯を捜索中に知り合いのジー (Zee) の家を訪ねる。何か情報はないか尋ねた後で、次のような会話をする。

Will : I got business up the road a piece. [It will] Take me about an hour.
Maybe I'll drop in later if your light's on.

(道路を少し行った所で用事があるんだ。1時間ほどかかるが、もしこの灯りが点いていたら寄ってみるよ。)

Zee : All right, Will.

(いいわよ、ウィル。)

— *Jesse James* (下線・和訳筆者)

b. 〈状況〉：牛の群れに河を渡らせようとする命令に対して仲間に不満を漏らす。

Mat : This will take us the rest of the day and part of the night. Why not cross fresh in the morning?

(これは残りの昼間と夜も少しかかるぞ。なぜ渡るのを朝にしないんだ?)

— *Red River* (下線・和訳筆者)

上記 (1a-b) のような事例では間接目的語が現れている。そのうち、上記 (1a) (下記 (2) として再掲) において、

(2) It will take me about an hour.

その構造は下記 (3) となる。

(3) 主語 + TAKE + NP₁ [間接目的語 (人)] + NP₂ [直接目的語 (時間)]

上記 (3) の解釈は、主語の指示物が NP₂ を「掴み取る」となる。意味の上から、間接目的語である NP₁ を省略することは可能であるが直接目的語である NP₂ を省略することは不可能である。このことは下記 (4b-c) に表示される通りである。

(4) a. It will take me about an hour. (= (2))

b. It will take about an hour.

c. *It will take me.

上記 (4b-c) のような目的語の省略は、下記 (5b-c) に示されるように、授与動詞について広く適用される。

(5) a. Taro gave Hanako an English book.

b. Taro gave an English book.

c. *Taro gave Hanako.

上記 (5a) は、下記 (6) のように形を変えることが可能である。

(6) Taro gave an English book to Hanako.

「移動」概念に内包される「出発点」と「到達点」からすると、上記 (6) と同様に上記 (2) は下記 (7) のように形を変えることが可能である。

(7) It will take about an hour from me.

上記 (7) のように、「出発点」表示前置詞である from を想定すれば、上記 1. (1a-b)（下記 (8a-b)）として再掲）と一貫した説明ができる。

(8) a. The baby took the toy from its mother.

b. The baby took the toy from the table.

すると、上記 (7) は、「その用事が私から 1 時間程度を取るだろう」と解釈される。

おわりに

以上の考察から、「名詞（句）+ take + 時間」表現における「時間」は、典型的には、複数化される授受可能な物理物とみなされる時間であることが明らかにされた。本稿で論じられた時間は、下記 (1) のように、take の目的語として典型的な時間からそうでない時間へと、>記号を用いて示すことができる。

(1) 複数化される時間 > 長さがある時間 > 分量がある時間

上記 (1) で示された時間はいずれも客体化された時間であるために take に後続するが、主観的な経験に基づいて時間を捉える文化においては「動作主が作用を及ぼす時間」という捉え方はなされないと思われる。

「名詞（句）+ take + 時間」表現においては、「時間」の他にも主語の問題も論じる必要がある。Take の典型的な主語は動作主としての振る舞いを見せる「人」とであるとされているために、「人」以外の主語を取る事例がテーマとなるが、このことについては稿をあらためて論じたい。

参考文献

- Konishi, T. et al. (eds.) (小西友七他編) (2001) 『ジーニアス英和大辞典』 東京：大修館書店。
Lakoff, G. and M. Johnson. (1980) *Metaphors We Live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
Norvig, P. and G. Lakoff (1987) "Taking: A Study in Lexical Network Theory." *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. 13: 195-206.
Takebayashi, S. et al. (eds.) (竹林滋他編) (2002) 『新英和大辞典』 第六版 東京：研究社。
Whorf, B. L. (1956) *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. Massachusetts: The M.I.T. Press.

映画

- Jesse James* (1957, 米, Twentieth Century Fox Film Corporation.)
Red River (1948, 米, United Artists.)
Shane (1953, 米, Paramount Pictures Corporation.)